

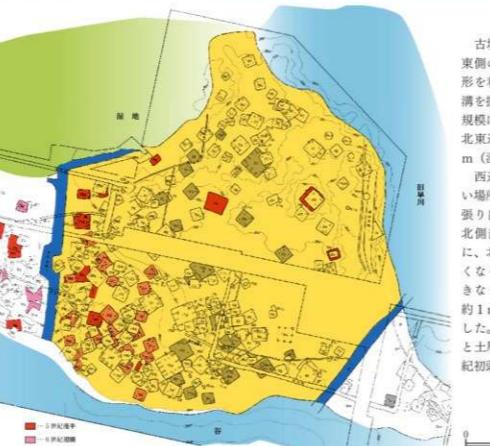


小角田前遺跡の住居跡検出状況(北から)
手前が国道17号バイパス
(上武道路)。

小角田下遺跡から出土した墨書土器（10世紀）
※『和名類聚抄』（平安時代中期）にある新田郡6郷うちの「淡辻」は、「たこう」とされ、現在も「高尾」名があり、高尾の地を「淡谷郷」にあてる説がある。



古墳時代の豪族居館



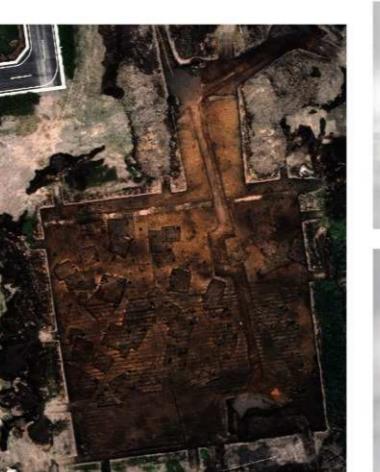
の豪族居館跡は、南側の谷、北川、北西側の湿地という自然地、台地を分断するように2本の平面形は五角形状をしています。東約105m(谷)、東西約60m(溝)、0m(旧早川流路)、北西約90m(溝)、西約70m(溝)です。

は、細長い台地中央部の最も狭東西に分断するように掘られた、を持つ直線部約70mの溝です。において台地辺縁部に沿うよう向に鋭角に曲がり、だんだん浅30m先の湿地地帯の確認ができます。規模は、幅約4m、深さ1、1回掘り直し確認できま跡の時期は、満から出土遺物の状況から、5世紀後半と6世時期が想定できます。



おじまこうぎょうだん 古いせき 尾島工業団地遺跡

かぶきいせき こずみだしもいせき こずみだませいせき みづくぼいせき
歌舞妓遺跡・小角田下遺跡・小角田前遺跡・水久保遺跡
みづくぼにいせき みづくぼさんいせき みづくぼよんいせき ねづみづかいせき
水久保II遺跡・水久保III遺跡・水久保IV遺跡・鼠塚遺跡



豪族居館跡の西辺の掘出土土器群（6世紀前半）



居館跡の西辺の堀出土土器群（5世紀後半）

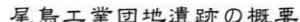


居館跡の西辺の掘出土土器群（6世紀前半）

田市教育委員会 文化財課
0495 群馬県太田市柏川町 520
276-20-7090 FAX.0276-52-6080
印刷 平成 22 年 2 月



（保遺軸から検出した古墳時代の豪族居館跡の張り出し部（北西から））



尾島工業団地遺跡は、太田市野良田町・小角田町に所在し、早川と石川田の間に位置する冲積地を挟んだ複数の台地上に立地します。1983年から1985年にかけて尾島工業団地の造成に伴い、尾島町教委と県企業局からなる尾島工業団地遺跡調査研究会が発掘調査しました。調査面積は、18haに及びます。遺道は、台地ごとに歌舞妓道路・小角田下道跡・小角田前道跡・永久保道路・永久保久道跡・永久保跡・永久保跡・永久保IV路跡・廻塚道路などに分かれます。検出された主な遺構は、縄文時代の土坑4基・古墳時代の豊穴1基・円窓1基・居跡683軒・古墳3基(前方後圓1基・円墳2基)・豪族居館跡1箇所・奈良時代の豊穴居跡149軒・平安時代の豊穴居跡158軒・古墳時代から平安時代の掘立柱・建物69軒・時期不明の豊穴居跡158軒のほか、天明3年(1783)の浅間A軽石に覆われた江戸時代の水田、早川の旧流域も確認されています。



[View Details](#) | [Edit](#) | [Delete](#)



C地区
小鱼田前道路



1



水久保遺跡の9世紀後半の住居
跡から出土した線刻土製紡錘車
「女田舎人頭口」(左)「女田舎口」(右)

土器の移り変わり

ここに並べた土器は、当時の人々の生活にかかせないものでした。土器には、その時代の特色が色濃く反映されています。土器の形は、現在の自動車が何年かごとにモデルチェンジをするように、時代によって少しずつ変化していきます。土器の形の変化を、年代順に並べることで編年といいます。これは遺跡を研究する上での基本となるものです。

ここでは、尾島工芸団地遺跡から出土した土器を、500年にまとめてみました。古墳時代の3世紀後半から平安時代後期の11世紀前半の16期に分類しました。土器の形の変わったところが分かりますか。特徴は、次のとおりです。

3世紀後半 弥生時代の特徴を持つ土器と古墳時代の土器である台付壺が出現し、両者が混在します。

4世紀前半 弥生系の土器が姿を消し、土師器のみとなり、壺は口縁部のS字状の台付壺が主流となります。

5世紀後半 須恵器が出現します。また、住居には柱が使用されるようになります。(以前は炉を使用)

6世紀前半 壺は須恵器壺の模倣した壺が現れます。壺は胴が長くなります。

7世紀前半 模倣壺が少なくなり、口縁部が内湾式へが出現します。壺の長脚化は一歩をむかえます。

7世紀後半 壺は頭部のくびれがやや意識されるようになり、胴部の最大径が上部に移り、壺高が低くなります。壺は、須恵器模倣壺から半球型の胴模倣壺になります。

8世紀後半 壺は口縁部が「く」の字状になります。

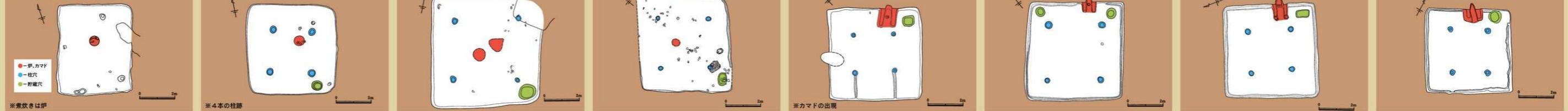
9世紀前半 壺は平底となり、壺の口縁部は、「コ」の字状になります。

9世紀後半 灰釉陶器が持ち込まれるようになります。

10世紀前半 土師器の壺が減少し、軟弱な須恵器壺が主流を占めます。煮炊具は、鉄釜を真似た羽釜や土釜に変わっていきます。



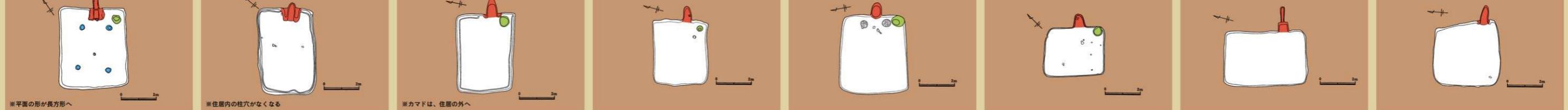
住居跡の移り変わり



飛鳥時代



奈良時代



参考
土師壺：弥生時代の系統を引き、文様の簡素化が進んだ赤褐色の素焼きの土器。
須恵器：朝鮮半島から渡來した技術で焼かれた青灰色の土器。ロクロ整形、登り窓で焼成。

灰釉陶器：奈良時代後半から平安時代にかけて猿投窯(愛知県)を中心として東海地方全域にわたって焼かれた、植物灰を原料とした釉をかけて高火力で焼成した陶器。

*平面形の形が長方形へ

*柱穴がなくなる

*カマドは、住居の外へ